

# 中学校英語教育における CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) 応用の取り組みの事例

The Use of CEFR in Junior High School English Education

森本 治子

Haruko MORIMOTO

## I. はじめに

様々な言語を有する国家の集合体であるヨーロッパ域内では、学術的・経済的な交流を促進するために外国語教育が重要な位置を占めている。欧州評議会言語政策部門は、言語能力を評価するための基準としてCEFR (Common European Framework of Reference for Languages: ヨーロッパ言語共通参照枠) を公開した。欧州評議会により制定されたCEFRとはヨーロッパにおいて、外国語教育のシラバス、カリキュラム、教科書、試験の作成時および学習者の能力評価時に共通の基準となる指標である。また外国語でコミュニケーションを取るために、学習者が備えていかなければならない知識と言語能力を広範囲にわたって詳細に規定している。

CEFRは外国語教育の分野では欧州内にとどまらず、中国、韓国、台湾などアジアの国でも注目を集めている。日本の教育現場においては慶應義塾、東京外国語大学やスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) に指定された福岡県立香住丘高等学校において応用が試みられている。CEFRは多くの国で、語学の評価の領域にとどまらず、教材の作成や授業にまで大きな影響力を持つといえる。

本稿は、上記の外国語能力共通参照枠を応用した中学校英語教育における取り組みについての実践的研究報告である。CEFRを参照することで学習者の現時点での語学力を推測し、建設的な授業設計ができると考える。ここではCEFRの日本における中学校英語教育の応用事例として、目白研心中学校における「ランゲージ・ポートフォリオ」を応用した生徒の英語学習についての考察を加えた。

## II. CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) の概要

### (1) CEFRの目的

ヨーロッパでは、様々な言語・文化的背景を持つ人々や地域が平和的に共存できるように、欧州評議会を中心にヨーロッパ内での言語政策や言語教育政策を進めてきた。1970年代には、その言語政策に基づいたプロジェクトを推進し、成果として、1975年にvan Ekを中心とするグループがコミュニケーション・アプローチの理念を背景に「The Threshold Level」を発表した。これは言語学習者が適切なコミュニケーションを取るためには、少なくとも何ができれば

いいかという敷居 (threshold) にあたるレベルを示したものである。日常生活において一人でコミュニケーション行動ができることを目標に掲げ、そのために必要なトピック、機能、概念、語彙、文法項目を記した。ここでは、初心者が身につけるべき言語要素が概念機能シラバスをもとに記述され、教材作りと授業の指針が示された。

ヨーロッパ統合の動きに合わせて、欧州評議会は1990年代半ばに既存の言語能力試験、および言語学習、教育に関連するガイドラインを一貫した枠組みとして打ち出すことに取り組んだ。CEFRは、ヨーロッパにおける外国語教育の向上のために、第二言語の使用、教育方針や学習者の達成度など、様々なことについて共通の理解を持つという目的で開発された。ヨーロッパの言語教育のシラバス、カリキュラムのガイドライン、試験、教科書等々の向上のために全ヨーロッパ共通の一般基盤を与えることを意図している。

理念としては、欧州の秩序を保つために言語は人権の一部であり、言語を基盤とする文化やアイデンティティを尊重しなければならないという考えであり、「複言語主義 (Plurilingualism)」と「複文化主義 (Pluriculturalism)」を取り入れている。欧州域内では教育や仕事の機会を求めて人々が自由に移動し、必要に応じて言語を切り替えながら使用している。政治、文化、経済の分野においても異民族間でコミュニケーションを図ることが重要であり、各国の教育機関や企業は学習者の言語能力を評価するために共通化された評価基準が必要であった。様々な言語に適用可能な共通参照枠を定めるにあたっては、学習者の習熟度レベルを客観的に記述して、それぞれの学習段階で測定できる一貫性のある基準設定が求められた<sup>1)</sup>。

その目標のもとに、CEFRは言語能力を6段階の習熟レベルに分けている。A1、A2はBasic User (基礎段階の言語使用者)、B1、B2はIndependent User (自立した言語使用者)、C1、C2はProficient User (熟達した言語使用者)である。CEFRのレベル分けの特徴は、その基準が語彙や文法などの言語に関する知識ではなく、学習者が言語を用いて「何が」できるのか、また「どの程度」できるのかに基づいて全て能力記述文である「Can-do statements」で表されていることである。CEFRが言語使用者の行動を評価基準にしていることは、理念が行動主義に基づいていることを表している。

CEFRは複数の言語に共通して適用する基準であるため、それぞれの言語に固有な文法や語彙などの要素は必然的に取り除かれる。「Can-do statements」は様々なコンテキストのもとで細分化して記述されているが、その言語使用の領域は大きく私的領域、公的領域、職業領域、および教育領域の四つに分類されている。CEFRは言語教育の目標ではなく、言語教育の評価基準を記述しており、日本の学習指導要領とは異なる。CEFRを用いた評価は、学習者の言語能力を位置づけるものであり、言語能力の数値化を提唱するものではない。

またCEFRは、欧州域内における言語教育・学習は、就学時期に限定されることなく、国や特定の教育機関の枠を越えて学習者が生涯にわたって取り組むという理念に基づいている。学習者が自らの学習を客観的に位置づけることにCEFRを役立て、ヨーロッパ全体での共通基準とするものである。「読む」「聞く」「書く」「話す」「やり取りする」の5技能について、6段階

に分類しているが、この基準はどの段階までをいつまでに達成しなければならないと規定するものではない。従って、学習者個人の生涯にわたる言語学習を欧州内のどこに住んでいても継続的に測定することができる。またヨーロッパ各国の異なる教育システムのもとで、教育行政関係者や教師が国境を越えて外国語教育に取り組むことを奨励している。

CEFRの能力記述 共通参照レベル『全体的な尺度』

言語使用者 熟練した	C2	聞いたり、読んだりしたほぼすべてのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに流暢に、また自然に自己表現ができる。
言語使用者 自立した	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解することができる。お互いに緊張しないで母語話者とやり取りができるくらい流暢かつ自然である。
	B1	仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。
言語使用者 基礎段階の	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。

吉島茂、大橋理枝、他〔訳・編〕『外国語教育Ⅱ—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』朝日出版社。p.25より抜粋 ©Goethe-Institut Tokyo

## (2) CEFRと日本の英語教育

CEFRは2001年の刊行以来、欧州だけでなく世界の言語教育に大きな影響を与え、35を越える言語に翻訳されている。日本国内においてもCEFRを応用しようとの試みがいくつか行われている。大学においては、英語コミュニケーションの熟達度を測定する目的でCEFRを応用する茨城大学（福田、2009）<sup>2)</sup> CEFRを参照して多言語に適用可能な基準枠を構築しようとする東京外国語大学（和田・長沼、2004）<sup>3)</sup>、大阪外国語大学（現大阪大学）（真嶋、2007）<sup>4)</sup>などの取り組みがある。慶應義塾大学では、小学校から大学院までを備えた総合的な教育機関である利点を生かして、独自のCEFRの刊行を目指している。<sup>5)</sup> 高校においては、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi）指定校の福岡県立香住丘高校、神戸市立薬合高等学校、宮城県立泉高等学校においてCEFRを参照した独自の「Can-do」リストや評価基準を作成している。またCEFRを英語以外の言語に応用する取り組みも実施され、国際交流基金は「JF日本語教育スタンダード」の開発に2005年から取り組み、2010年に「JF日本語教育スタンダード2010」として発表した。CEFRの言語熟達度のレベルに基づき、日本語の熟達度

を「Can do」という形式の文で示している。日本国内では、英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシル、ドイツ連邦共和国の外務省傘下の機関であるドイツ文化センター（ゲーテ・インスティトゥート）、フランスの日仏センターでもCEFRに準拠した語学教育が行われている。このように日本においてCEFRは徐々に広がりを見せているが、能力記述文である「Can-do statements」のみを取り入れている場合が多く見られる。

日本の英語教育に関する先行研究としては、「第二言語習得研究を基盤とする小・中・高・大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究」（平成16年度～19年度科学研究費補助金基礎研究A、研究代表者小池生夫）が挙げられる<sup>6)</sup>。ここでは、日本・中国・韓国・台湾・ヨーロッパの言語政策を比較し、CEFRを参照した日本モデルの設定について調査した。また学習指導要領が抽象的で到達目標を基礎的な部分から示している点を指摘した上で、企業が求める英語力の調査による最高到達基準値を設け、それを達成するために逆順方式による各学校段階の到達目標を設定した。同研究では、最高到達基準値を割り出すために、まず実際に英語で仕事をしている7,300人の国際ビジネスマンの実態調査を行った。分析結果に基づいて、専門分野で交渉ができるレベルをC2（TOEIC 900点以上）、第2段階レベルをC1（TOEIC 850点以上）、最低レベルの第3段階レベルをB2（TOEIC 750点以上）と設定した。そこに到達するためには大学4年生修了時点では、B2～C1、高校卒業時点ではB2前後、中学校卒業時点でA2、小学校卒業時点でA1～A2に到達することが必要であると想定した。そして目標を達成するために国家戦略として外国語教育政策を樹立し、一貫したカリキュラム、学習法、教材、教授法、教材、教師育成の改革が必要であると提言している。

日本の外国語教育には学習指導要領はあるものの言語教育政策がない（山田、2005）<sup>7)</sup>とされているが、上記の取り組みも国の言語政策として議論がされているものではない。一方、中国は1990年代に学習指導要領に熟達度レベルを取り入れ、台湾では2005年に政府声明により外国語の熟達テストはCEFRを土台に進めることとした。（小池、2009）<sup>8)</sup>

次にCEFRの共通参照レベルを学習の場に取り入れたヨーロッパ言語ポートフォリオを概観する。

### Ⅲ. ヨーロッパ言語ポートフォリオ（European Language Portfolio: ELP）

#### （1）概要

ヨーロッパ言語ポートフォリオ（European Language Portfolio：以下ELP）は、欧州評議会によって考案され、欧州各地で言語学習、異文化学習のために使用されている。学習者、学習環境、学習目的に応じて、様々なELPが開発されている。ELPは、欧州評議会の言語教育政策を推進するために考案されており、言語学習と欧州評議会加盟国間の移動を促進することを目的としている。またCEFRの共通参照レベルの詳細な記述を学習の場に取り入れ、学習者の生涯にわたる言語学習歴、言語試験結果、職場での言語能力評価に活用しようとするものである。

欧州評議会の定義によると、ELPは生涯学習を促進し、学習者が取得した資格をはじめ、教

育機関内外でのすべての言語学習や異文化体験を記録するものである。構成は、言語能力が確認できる言語パスポート (language passport)、学習目標を設定し自己評価により学習進捗状況を把握し、記録できる言語学習記録 (language biography)、学習成果が保存できる資料集 (dossier) の3部からなる。ヨーロッパ言語共通参照枠であるCEFR参照レベルが基盤となっているので、ELPにより自己の言語学習達成度を明確に示すことができる。

ELP開発のきっかけとなったのは、1991年にスイスで行われたシンポジウムであった。そのシンポジウムではCEFRの開発促進とともに、ELPの形式および機能を考案する委員会を設立するという提案がなされた。報告書には、「ELPには、ヨーロッパ共通基準に対応する資格を記入するセクション、学習者が明確に自己の言語学習経験を記録できるセクション、そして学習成果のサンプルを入れるセクションを含むべきである」(Little, 2002)<sup>9)</sup>と言及され、これが現在のELPの原案となった。

スイス、ドイツ、フランスで最初のELPが開発され、1997年には欧州評議会によりELP開発における提案が正式に発表された。そして1998年から2000年にわたりELPパイロットプロジェクトが実行され、欧州評議会加盟国のうち15か国および3つの組織<sup>10)</sup>が参加し、ELPの開発、試行的導入が行われた。このパイロットプロジェクトは、小学校から大学、成人およびELP導入のための教員研修まで幅広い教育機関で行われ、参加者は合計で30,827名であった。2000年10月に欧州評議会言語政策部より出版された最終報告書によると、ELPの言語的多様性と自立学習の推進は学習者や教員から高い割合で認められ、高い評価を得た<sup>11)</sup>。またELPの自己評価については、多くの学習者(70%)が学習の動機づけになると感じており、自己評価の手助けになると答えている。しかしながら、自己評価には問題点も報告されている。それは、学習者の自己評価に対する教員の信頼度であり、学習者が過度に高くあるいは低く自己評価するのではないかという点が指摘されている<sup>12)</sup>。

ELPが開発された2001年には、ELPをよりよく理解するための教員と教員研修者向けのガイドブック(Little and Perclova, 2001)とELP開発を目指すのに役立つ開発者向けガイドブック(Schneider and Lenz, 2001)が評議会から刊行され、欧州評議会のELPに特化したウェブサイト上で公開されている<sup>13)</sup>。多くの評議会加盟国において自国内の現状や様々な年齢に特化したELPが開発されており、2011年現在、公式に認定されたELPモデルは103に上る。

「中央ヨーロッパ版ポートフォリオ」(European Language Portfolio for the Central European Region:ELPCER)は、ヨーロッパ全体の基本的なフレームワークに従い、中央ヨーロッパ用として開発されたものである。ウィーン市教育委員会を本部とするCERNET(Central European Network for Education Transfer)により2006年に発行され、オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリーで活用されている<sup>14)</sup>。エディンバラ大学のイトン教授を中心とする外部機関は、このポートフォリオが教師、生徒、教育行政に携わる人に与えた影響を調べることを目的として調査を実施した。報告書で最も意義ある成果とされているのは、このポートフォリオが生徒、教師、親への強い動機づけとなるという点である<sup>15)</sup>。当初、生徒

が自分の進歩を自己評価することには疑問の声もあったが、ポートフォリオが自分自身を省みるよいチャンスを与えてくれることがわかった<sup>16)</sup>。

## (2) 言語パスポート (Passport)

言語パスポートには、学習者が言語に関する技能の達成度、学習経験、異文化体験を自己評価表に従って簡潔に記入することができる。さらに学習している言語をCEFR参照レベル(A1～C2の6レベル)に基づき、技能別に自己評価することができる。技能は「聞くこと」(listening)、「読むこと」(reading)、「インタラクション」(spoken interaction)「表現」(spoken production)、「書くこと」(writing)の5つのコミュニケーション技能に分かれている。また自己評価以外に、教師による評価や取得した資格を記入することができる。言語学習、異文化体験に関しては、学校での学習や職場における言語使用、またネイティブスピーカーとのやり取りも記入できるようになっている。学習者は言語パスポートを用いて、自分の言語能力の到達度を確認することができる。

## (3) 言語学習記録 (Biography)

言語学習記録は、学習者が目標を設定して、重要な言語学習や異文化体験を記入するページである。言語パスポートが学習者の言語学習の達成度や異文化体験を簡潔にまとめるものであるのに対し、言語学習記録は学習者が計画を立て、それを実行していく上での学習過程や進度を観察し、自己評価を行うのに役立つ記録である。

また自立学習を促進する目的もあり、学習者が目標とする言語の各技能において、CEFRを参照した自己評価を行う。チェックリストには、技能別に達成すべき目標が能力記述文(descriptor)で表されている。従って、学習者は自分の言語学習を振り返り、自分に必要なことは何かを考えた上で次の目標をたてることができる。また複言語主義に基づき、学習者は、教育機関内外でのすべての言語学習や異文化体験を記入することができる。

## (4) 資料集 (Dossier)

資料集には、学習者が自らの判断で言語の到達度を示すのに重要なものを入れていく。従って、言語パスポート、言語学習記録に記入してある言語・異文化体験で達成した事柄を資料として保存することができる。具体的には、学習内容をまとめたもの、プロジェクト、資格の証明書、教師からのフィードバックである。成人の学習者は、公的試験の結果、手紙やレポートなどの目標言語を使用する能力を証明する資料を保存することができる。

次にヨーロッパ言語ポートフォリオ(ELP)の応用事例として、目白研心中学校の取り組みについて述べる。

#### Ⅳ. 「European Language Portfolio (ELP) ジュニア版」を応用した取り組み

##### (1) ACE プログラムの概要

目白研心中学校では、1994年より17年間にわたり、本校独自のACE（Active Communication in English）プログラムにおいて、海外のテキストやオリジナルテキストを使用し、実践的英語コミュニケーション能力の育成を目指してきた。ネイティブ教員によるACEの授業を週3時間設定し、各ホームルームを2分割した少人数制で授業を実施している。また検定教科書の「New Crown English Series」（三省堂）を使用した日本人教員による英語の授業を週4時間設定し、ACEの授業と連携を取りながら総合的な英語力の定着を目指している。英語の文章を書いたり、発表をしたりするなど、体験、実践を繰り返しながら「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を身につけている。また「体験型イングリッシュ・キャンプ」とカナダ修学旅行を通して、生徒が英語に触れる機会を多く提供している。生徒は学習した表現を実際に使い、自分の伝えたいことを表現する過程を通して、英語を学ぶ意義を実感する。さらに生徒が将来必要とする英語のスキルを考えて、インターネットを利用して読む力と書く力、そして対話を成立させられるだけの聞く力、話す力を育成している。

##### 目白研心中学校 学年別「ACEプログラム」

中学1年	中学2年	中学3年
発音を鍛えて、作文力を高める		異文化理解力をつけ、自己表現力を培う
<ul style="list-style-type: none"> <li>●ネイティブの発音に慣れる</li> <li>●英作文日記を書く ～林間学校の思い出～</li> <li>●スピーチ「My First Year at Mejiro Kenshin」</li> <li>●「Starfall」フォニックスを使ったコンピュータプログラム</li> <li>●Call教室使用</li> <li>◆サマーキャンプ</li> <li>◆英語の歌合唱</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●英文日記</li> <li>●課題作文</li> <li>●校外学習 上野動物園 (動物についての学習)</li> <li>●カナダの文化について調べる</li> <li>●夢を語るスピーチ</li> <li>●多読プログラム</li> <li>「Oxford Reading tree」</li> <li>◆校内クリスマスキャンプ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●カナダのポスター制作</li> <li>●ホストファミリーへの手紙</li> <li>●日本文化の紹介 (プレゼンテーション)</li> <li>●社会問題への意見を表明するスピーチ</li> <li>●多読プログラム</li> <li>「Oxford Reading tree」</li> <li>「Penguin Readers」</li> <li>●英文日記</li> <li>◆カナダ修学旅行（語学研修とホームステイ）カナダ修学旅行ポスター</li> </ul>
◆スピーチコンテスト	◆スピーチコンテスト	◆スピーチコンテスト
【テキスト】		
「Mega Goal Intro」 (McGraw Hill)	「Time Zones 1」 (Cengage Learning) 「Very Easy True Stories」 (Pearson/Longman)	「My First Passport」 (Oxford) 「Time Zones 2」 (Cengage Learning)

## (2) 中学校3年生ACEプログラムにおける取り組み

イギリスの教育機関であるCiLT (The National Centre for Languages) が作成した「European Language Portfolio」はCEFRの理念に基づき、欧州評議会の認定を受けている。15歳以上の学習者を対象としたものと初等教育(7歳から11歳)で活用されているイラスト入りのジュニア版があり、電子版がウェブサイト上で公開されている。

中学校3年生ACEプログラムでは、「European Language Portfolio (ELP) ジュニア版」を応用して、A1からB1レベルまでの英語学習の自己評価を試みた。CEFRの理念に基づき作成されている「My Language Portfolio」は、「My Language Biography (私の学習記録)」、「My Language Dossier (私の資料集)」、「My Language Passport (私の言語パスポート)」の3つに分かれている。学習者は、言語学習で不可欠なスキルにおいて成果を記録し、具体的な語学力を示すことができる。この「ランゲージ・ポートフォリオ」は、イギリスの初等教育を対象としたものであり、本校においても生徒の自己評価に有効だと考えた。

「My Language Biography (私の学習記録)」には、「聞く」「話す」「やり取りする」「読む」「書く」の5技能において、イラストを使って目標が書かれており、生徒は到達したレベルを確認することができる。「My Dossier (私の資料集)」には、生徒が自分で保存する作品を決め、各自が授業内でのプロジェクトやポスター、手紙、スピーチ、成績表、資格証明書をファイルに保存する。「My Language Passport (私の言語パスポート)」は、言語能力の自己評価である。ACEの授業の中で、中学3年生の生徒に各自がどのレベルに該当するかについての自己評価を実施した。CEFRの能力表に基づいたチェックリストA1 (Grade 1-3)、A2 (Grade 4-6)、B1 (Grade 7-9)の項目については、英文の日本語訳を表記した。

European Language Portfolio Junior Version-Revised Edition 2006

CiLT (The National Centre for Languages) CEFR能力表に準拠 (日本語は筆者訳)

### LISTENING 「聞く」

Breakthrough A1 Grade1-3	I can understand familiar words and very basic phrases when people speak slowly and clearly. (基本的な言葉をゆっくり、はっきりとした発音で話してくれれば理解できる。)
Preliminary A2 Grade4-6	I can understand phrases and high frequency words relating to basic personal and everyday matters and the main points in short, clear, simple messages and announcements. (短いメッセージや放送の中の日常生活に関わる言葉やフレーズ、主な内容を理解できる。)
Advanced B1 Grade7-9	I can understand the main points of clear standard speech on familiar topics which I meet regularly in my spare time and at school. I can understand the main points of many radio or TV programmes on topics which interest me when the commentary is fairly slow and clear. (身近な話題についての標準的なスピーチの主な内容が理解できる。ゆっくり、はっきりとした発音で話してくれれば、興味のある内容のラジオ・テレビ番組の解説の要点が理解できる。)



SPEAKING and TALKING to SOMEONE 「話す・やり取りする」

Breakthrough A1 Grade1-3	I can say/repeat a few words and short simple phrases. (簡単な単語やフレーズを話したり、繰り返したりすることができる。)
Preliminary A2 Grade4-6	I can give a short prepared talk (describe a picture or people, my school, my home) and take part in a simple conversation on familiar topic. (人々の様子、学校、自分の家について事前に用意した簡単なスピーチ、また身近な話題について簡単な会話ができる。)
Advanced B1 Grade7-9	I can join in an unprepared conversation on everyday topics. I can tell a story and can describe things I have done and what I am going to do, giving reasons for opinions and plans. (日常的な話題についての会話に加わることができる。自分の行動や予定、意見や理由について話すことができる。)

READING 「読む」

Breakthrough A1 Grade1-3	I can understand familiar names, words and very simple sentences. (身近な名前、単語、簡単な文を理解できる。)
Preliminary A2 Grade4-6	I can read very short, simple texts and find information I need in longer texts such as simple messages, stories or internet texts. (非常に短いテキストを読み、簡単なメッセージ、物語、インターネットのテキストの中から必要な情報を探することができる。)
Advanced B1 Grade7-9	I can understand authentic texts on topics of interest to me and the description of events, feelings and wishes in personal letters or e-mails. (興味のある内容についての原文、個人的な手紙やメールに書かれた出来事・感情・願望について理解できる。)

WRITING 「書く」

Breakthrough A1 Grade1-3	I can write a short, simple postcard or e-mail message. I can write simple information about myself. (はがきやメールの短いメッセージ、自分についての簡単な情報が書ける。)
Preliminary A2 Grade4-6	I can write short, simple notes and messages. I can write a very simple personal letter or e-mail message. (短い簡単なメモやメッセージ、簡単な手紙やメールを書くことができる。)
Advanced B1 Grade7-9	I can write simple connected text on topics which are familiar or of personal interest to me. I can also write personal letters and e-mails describing experiences and impressions. (興味のある内容について関連のある短いテキストを書くことができる。また自らの経験や印象について個人的な手紙やメールを書くことができる。)

上記したレベルを基本にし、中学三年生を対象にアンケートを実施した。調査によると「聞く」「話す・やり取りする」「読む」「書く」の4技能についてGrade 3 (A1) からGrade 7 (B1) まで以下の調査結果となった。

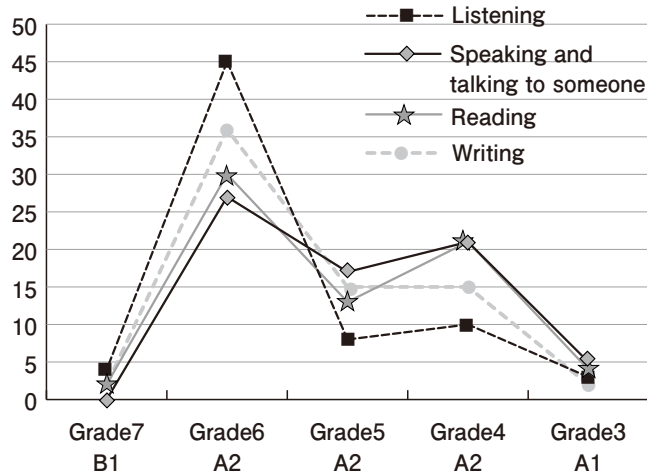
目白研心中学校3年 「言語パスポート」調査 実施日 平成23年9月5日

中学3年生在籍 71名 回収70名

(名)

	Grade7	Grade6	Grade5	Grade4	Grade3
	B1	A2	A2	A2	A1
Listening	4	45	8	10	3
Speaking and talking to someone	0	27	17	21	5
Reading	2	30	13	21	4
Writing	2	36	15	15	2

上記の表をもとにグラフ化すると下記のような分布となった。すべての技能において最も到達度が高かったのがGrade 6 (A2) レベルであり、「聞く」においては64.2% (45名)、「話す・やり取りする」においては38.6% (27名)、「読む」においては42.9% (30名)、「書く」においては51.4% (36名)であった。CEFRに準拠した能力記述文を一つずつ確認していくことで生徒は自らの到達度を確認し、次の学習目標を明確にすることができたといえる。

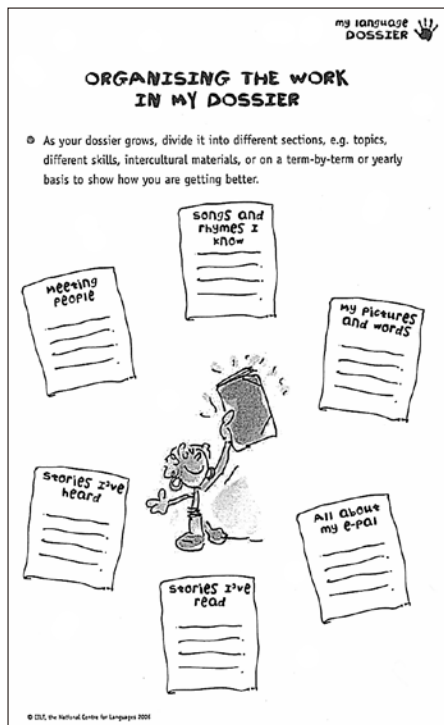


My Progress: Summary chart

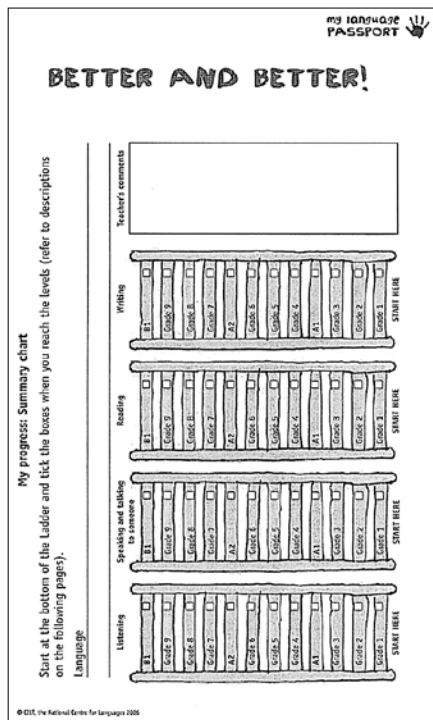
また「自分の学力を評価することは、今後の英語学習に役立つと思うか」という質問に対しては、生徒の68.6%（48名）が肯定的評価をした。理由としては、「自分のレベルを知ることは学習の励みとなる」、「自分の実力を知り勉強の方法を工夫するために必要」、「自分の力を改めて認識し、勉強しようと思えるから」、「自分の今のレベルがわかり、どのくらいレベルアップすれば目標に向かっていけるかわかるから」、「言語の学習記録を作ることは進学や就職の際に役立つ」、「自分の英語力を伸ばすには、どこを勉強すればいいのかを知ることができた」ことを挙げた。一方、生徒の22.9%（16名）が「どちらともいえない」と回答し、理由として能力記述文がわかりにくいことを挙げた。このほか「自己評価をする際に自分のレベルを過小評価してしまう」という記述もあった。また生徒の8.5%（6名）が「そうは思わない」と回答し、「自分では正確に評価できないことから英語学習に役立つとはいえない」と記述した。

生徒たちにとって英語の勉強自体が目的なのではない。生徒にとって言語学習は自己の進路を実現するために欠かせないものである。英語教師としての役割を考えると、生徒が英語を使って知識を得て、英語でコミュニケーションが取れるように、自ら学ぼうとする意欲を高めることである。そのために「言語パスポート」を使った自己評価は有効であると考えられる。

『ランゲージ・ポートフォリオ』



My Dossier



My Passport

「MY CONTACTS AND INTERCULTURAL EXPERIENCES（私の異文化体験）」

List the main experiences and contacts you've had with people or places abroad, e.g. e-mails, postcards, letters, meeting with people, excursions, video exchanges, holidays.

海外の国々、また外国の人々との交流について主なものを挙げなさい。

〈中学3年生の生徒 記入例〉

Contact or experience	Details	When?
		<b>【Junior 1】</b>
・ Entrance ceremony	Guest speaker from Canada	April
・ ACE classes	Meeting native teachers	April
・ On campus camp	English songs, games	July
・ Summer camp at Shigakogen	English activities (hot dog roast at the riverside, information rally, treasure hunt)	July
・ School festival	Poster presentation: My Best Memory from Shigakogen	September
・ Halloween celebration	Carving pumpkins, trick or treat	October
・ Exchange teacher from Canada	Presentation about Canada's national sport (ice hockey)	November
・ Guest from New Zealand	Short speech about New Zealand	January
		<b>【Junior 2】</b>
・ ACE classes	Meeting new teachers	April
・ On campus camp	Excursion to the aquarium	July
・ E-mail (Call Lab)	Writing e-mails to ACE teachers	July
・ School festival	Poster presentation: My Summer Vacation	September
・ Canadian Embassy visit	Presentation about Canada by Canadian Embassy staff	December
		<b>【Junior 3】</b>
・ ACE classes	Meeting new teachers	April
・ Meeting an exchange student from Canada	Interviewing and asking questions	May
・ Study about Canada	Group presentation about culture, sports, food and famous places to visit	June
・ Host family letter	Writing a letter of introduction to host family	June
・ Trip to Canada	10 day school trip (Victoria, West Vancouver, home stay)	July
・ School festival	Poster presentation: My Canada Trip	September

## V. まとめ

中学校3年生ACEの授業において、英語の学習記録（My Biography）を作成し、言語パスポート（My Language Passport）を応用した自己評価を実施したことが、生徒の学習意欲を高めたことが上記の調査から明らかになった。生徒は、CEFRに準拠した能力記述文により自分の到達度を確認することで、次の学習目標を設定することが可能となった。さらに資料集（My Dossier）にACEの授業で作成したプロジェクト（スピーチ、手紙、カナダ修学旅行ポスターなど）や語学力を証明する書類をいれることで、自らの英語学習歴を確認し、達成感を味わっている。授業時間や内容が充実しても、学校で教えられることには限りがある。重要なのは、生徒たちが自ら学ぶ力を身につけられるように授業を工夫し、生徒の学習意欲を高め、継続した学習を可能にする自立性を養成することである。

今後は、中学校2年生後期の段階から「ランゲージ・ポートフォリオ」を応用し、生徒が到達度を確認しながら自らの学習意欲を高める活動を継続していきたい。生徒が自発的に言語学習に取り組むためには、自らの学習を計画、モニター、評価する能力を育成することが重要であると考える。

### 【註】

- 1) 東條加寿子「CEFRと日本の英語教育：一考」2010年度大阪女学院大学教職課程機関紙 教職活動報告・研究Vol.1 p.71 2011年
- 2) 福田浩子「日本の英語教育におけるCEFRの応用の可能性」人文コミュニケーション学科論集 p.6 茨城大学 2009年
- 3) 長沼君主「TUFUS言語モジュールにおけるシラバスデザイン」言語情報学研究報告 No. 2 p.111 東京外国語大学 2009年
- 4) 真嶋潤子「言語教育における到達度評価制度に向けて—CEFRを利用した大阪外国語大学の試み」間谷論集 大阪外国語大学日本語日本文化教育研究会 第1号 pp.3-27 2007年
- 5) 慶應義塾大学外国語教育研究センター HP「言語教育政策提言ユニット」  
[http://www.aop.flang.keio.ac.jp/section\\_2/page\\_1.html](http://www.aop.flang.keio.ac.jp/section_2/page_1.html) (2011年7月25日)
- 6) 小池生夫「第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究」平成16年度～19年度 研究代表者 小池生夫  
第3回教育再生懇談会 英語教育についてのヒアリング資料 2008年
- 7) 山田雄一郎『日本の英語教育』岩波新書943 pp.102-103 2005年
- 8) 小池生夫「CEFRと日本の英語教育の課題」英語展望 No.117 pp.14-19 英語教育協議会 2009
- 9) Little David “The European Language Portfolio: structure, origins, implementations and challenges” Language Teaching Vol.35 p.182 Cambridge University Press, 2002
- 10) パイロットプログラムに参加した国、および組織は下記の通り  
参加国：オーストリア、チェコ、フィンランド、フランス、ドイツ、ハンガリー、アイルランド、イタリア、オランダ、ポルトガル、ロシア、スロベニア、スウェーデン、スイス、イギリス  
参加組織：ヨーロッパ言語教育質的保証協会（EQUALS-The European Association for Quality Language Services）、ヨーロッパ高等教育言語センター連盟（CercleS-Confédération Européenne des Centres de Langues de l’Enseignement Supérieure/ European Confederation of Language Centres in Higher Education）、ヨーロッパ言語評議会（ELC-European Language Council）

- 11) -13) 駒形千夏「ヨーロッパ言語ポートフォリオ開発と導入に関する一考察」pp.73-74 現代社会文化研究 No.42 新潟大学 2008年
- 14) -16) 岡秀夫「ウィーンを中心とした英語教育改革—CEFRの応用と展開」pp.202-205 東京大学外国語教育学研究会『外国語教育学研究のフロンティア—四技能から異文化理解まで—』成美堂 2009年

#### 【参考文献】

- 岡秀夫「教授法のバックボーンにあるもの」英語教育 Vol.60 No.5 大修館 2009年
- 境一三「日本におけるCEFR受容の実態と応用可能性について—言語教育政策立案に向けて—」英語展望 No.117 英語教育協議会 2009年
- 寺内一「日本の英語教育はCEFRをどのように受け止めるべきか」英語教育 Vol.60. No.5大修館 2009年
- 東京大学外国語教育学研究会『外国語教育学研究のフロンティア—四技能から異文化理解まで—』成美堂 2009年

#### 【参考ウェブサイト】

Benesse 教育開発センター View 21 SELHi 特集号 SELHi データベース  
[http://Benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2006/sp/selhi\\_database/](http://Benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2006/sp/selhi_database/) (2011年8月1日)

Council of Europe “European Language Portfolio”  
[http://www.coe.int/t/dg-4/portfolio/default.asp?l=e&m=/main\\_pages\\_/welcome.html](http://www.coe.int/t/dg-4/portfolio/default.asp?l=e&m=/main_pages_/welcome.html)  
(2011年8月1日)

CiLT (The National Center for Languages) “Junior European Language Portfolio-Revised Edition”  
“Junior European Language Portfolio- Teacher’s Guide”  
<http://www.primarylanguages.org.uk/resources/> (2011年8月1日)

国際交流基金編 「ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages」  
[http://www.jpf.go.jp/j/japan\\_j/publish/euro/pdf/ceforfl.pdf](http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/publish/euro/pdf/ceforfl.pdf) (2011年8月1日)